

---

# 迷宮エトランゼ

月海苔

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

迷宮エトランゼ

### 【Nコード】

N2498X

### 【作者名】

月海苔

### 【あらすじ】

ベットで寝たのに起きたら真上に青空。いったいどうなってんだよ。。  
的な感じで始まるトリップ迷宮ファンタジー。主人公は大学生男子。だらけた生活を送っている典型的バカ学生のゲームヲタク。そんな彼が送り込まれたのは前日に寝るまでやっていたゲームの世界だった。というお話。

・この物語はややハーレム臭いかもしれません。

・この物語はやや主人公に補正が掛かります。（主に戦闘力と魅力  
e t c )  
・少々過激な描写を含むかもしれない予定です。（R15程度？）  
以上の項目と駄文に耐えられる方は暇つぶし程度にご覧あれ。そう  
じゃない方はお戻りくださいまし。

## 番外之巻 キャラクター簡易設定集（前書き）

おはにちばんわ、月海苔です。何気なくPV数見たら7000超えててリアルに鼻から汁が飛びました。びっくりしました。なので、お礼の意味も含めて設定を少し晒してみようかと思えます。これからもなんらかの節目があったりしたら番外編やおまけ設定を晒そうと思えます。最後に、拙作を見てくださる皆様に感謝を。

PS・次の本編はおそらく日曜に書けると思えますので、書きあがり次第更新します。

## 番外之巻 キャラクター簡易設定集

ギルド、 グロリオサ について

構成人員五名の超小型ギルド。ギルドメンバーは全員素人冒険者だが、コウ・ミスミ以外は一芸に秀でていたりするので地力は高い。現在ギルドランクE。名前の由来は百合科の花であるグロリオサ。花言葉は天分、華麗。人員は足りないがギルドマスターのおかげで資金は潤沢である。

グロリオサの構成メンバー詳細

オリーブ・デ・ラ・ロンバルディア（18）

ギルドマスター兼フロントガード。ジヨブは騎士、堅牢な防御を得意とする職である。西方の国の大貴族の三女。とある事情で現在家中中である。金髪を高い位置で結い上げている活動的な美人。目の色は薄い青。性格はいたって真面目でやや不器用。どこか又けている。興奮すると仕草がやや芝居がかった感じになる。恋愛や性的な話題に弱く、すぐ赤くなる。名前の由来は木犀科の木であるオリーブ。花言葉は平和、知恵。また、オリーブは平和と勇気の象徴としても用いられる。

三隅 香ノコウ・ミスミ(19)

レフトフロントアタッカー。ジョブは剣士、名の通り剣による攻撃を得意とする職である。異世界人(仮)。気づいたら無一文で見知らぬ土地にいた不憫青年。しかし最近は大美少女だらけの環境で順風満帆な冒険者生活を送っているリア充である。もげる。大学が地元と違う土地だったので一人暮らしをしていた。家族構成では長男。下に弟と妹がいる。黒の短髪にこげ茶の目の典型的日本人である。普段はボンヤリとした無害そうな青年である。行動にややギャグ補正あり。割とバーサーカー気質であり、戦闘に関しては才能がある様子。また、異世界転移後に身体能力などが上がっている。原因は・・・。名前の由来はキンポウゲ科の花ミスミソウから。花言葉は忍耐、自信。

カトレア・パフィオペディルム(14)

メインアタッカー。ジョブは考古学者。学者のジョブは専攻科目で分岐しており、考古学者はその名の通り古代文明についての知識を収めている。完全な後衛職であり、古代語魔法と、詠唱が長く威力が大きい上位古代語魔法を操ることができるが、カトレアはまだ上位古代語魔法を使えない。やや裕福な知識層の出身で両親ともに学者。大迷宮の不可思議さに魅せられブルーゲンビレアまでやってきた。紫の緩くウェーブした髪に同色の目。貧乳。背が低い。やや人見知り気質だが慣れればどうということはない。古代ヲタク。名前の由来は蘭科の花カトレアのパフィオペディルム属から。花言葉は華やかさ、純粋な愛。

マリーゴールド・アストウリアス（19）

ライトフロントアタッカー。ジョブは戦士。攻撃特化の紙装甲職で、メイスや槍、剣などを用いることが多い。マリーは槍を使う。南方のとある部族の戦士見習い。戦士としての修業で迷宮にきたが、気候が穏やかで水も豊富なブーゲンビレアをすっかり気に入ってしまった。修業が終わっても暫く帰る気は無いらしい。こげ茶色の長い髪に琥珀色に近い色の目。グラマラス。カラッとした明るい性格。下ネタには強いが恋愛にはウブ。海を気に入っており、最近の趣味は釣りらしい。釣りの腕前は大したことない。名前の由来はキク科の花であるマリーゴールド。花言葉は信頼、可憐な愛情。

タイム・ジュテッカ（18）

ガードウイング。ジョブは狩人。弓を使う中々後衛の職。畏などの警戒に優れている。しかしタイムは弓を得意としていない。元はオリーブ専属のメイド。敬愛するお嬢様の護衛兼世話係として着いてきた。豪華な縦ロール気味の金髪に緑の目。所作が貴族っぽく、口調も貴族っぽく、見た目も貴族っぽい。しかし従者。お嬢様大好き人間のお嬢様ヲタク。オリーブのためなら死ねる、などと常日頃から口走るくらい。男性が苦手らしい。やや神経質だが気配りができる人。名前の由来はシソ科の花であるタイム。花言葉は行動力、勇氣。





## 迷宮之巻　かくて迷宮は彼を迎えし。

覚醒。目を覚ましたとき、真っ先に見えたのは美しいアオ色だった。思わず目を奪われてしまう程に、青、蒼、あお。しかし、その色に見とれている己に対して、記憶は違和を唱え続けている。脳いわく、お前の自室の天井はこんなに青くねーぞ、と。違和感を噛み砕き、咀嚼し、飲み下したところでようやく気付いた。慌てて上体を起こし、辺りを見渡してみる。周囲には緑の草花が生い茂り、背の高い樹木が壁のように聳え立っている。つまり、森だ。そして、自分は記憶が確かならばゲームをした後時計が午前3時を指していることを確認し、明日の講義に差し支えるからと慌ててベットで寝た筈だ。しかし、依然として周囲は緑に囲まれているし、自分は露に濡れている下草に触れ、その冷たさを感じている。ひやりとしたその感触に、心臓が荒く跳ね上がる。

「夢、か・・・？」

自分で口に出しておいてなんだが、その線は無いだろう。なにしろ、頬を撫でる風の感触や爽やかな樹木の香りがし、意識や視界がこれだけはつきりとしているのだ。これが夢なら現実さえも夢に見えてくるだろう。いや、実際こんな、夢のような現実もしくは現実のような夢、を体感している身としては、これが後者であることを期待したいのだが。残念ながらさつきから左手で抓っている頬が痛くてたまらないことを鑑みれば、これは

「夢じゃ、ないんだろっな・・・はぁ・・・」

特大に重い溜め息をついてみても、状況は全く変わらない。今日の  
一限目は出ときたい講義だったのになー、なんて漏らしつつ、立ち  
上がる。とりあえずは、人か、町を探して保護を求めねばなるまい。  
現在地の森は、とても貧弱一般ピーポーな自分が生活できるところ  
ではないだろうし。遭難したときはじつと救助を待つといいらしい  
が、今現在の自分はそのケースには当てはまらないだろう。ならば  
やるべきことは一つ。

「ひたすら歩くしかない、か。はぁ・・・」

最近は何も飲み会と講義に追われ、休日にもつぱら課題とゲームだった  
のだ。己の体力の落ち具合を心配して、彼は深い溜め息をついた。  
不思議と、未知の環境への恐怖はなく、倦怠感だけが彼を支配して  
いた。

探索を決意してからおよそ二時間程。すでに彼の心は折れかけていた。

「なんなんだよ、ここ。わけわからんぞ・・・異様にデカイダンゴ虫がいるし、人間サイズのイカが歩いてるし、宝箱落ちてるし、白骨死体とか転がってるし!!!」

と、これら以外にも細々とした奇妙な現象、生物を目撃した彼は驚きのあまりパニックを起こしかけていた。こんなところが地球にあるわけない、てかイカはデカイとめちゃう怖い、それより白骨死体が怖い、宝箱の中身錆びた短剣だったしよばい、でも護身用にもってきちゃったよヤバイ、てか宝箱とかまるでRPGみたいな、

ふと、そこで思考が止まった。

RPG？

昨夜のゲームの内容がフラッシュバックする。確か昨日やってたゲームって迷宮系のRPGだったよな、しかも一階層が森の迷宮だった。ダンゴ虫っぽい敵もいた筈、確かオオダンゴムシって名前だ。出てきたときまんまかよ!!! ってツツコんだ覚えあるし。デカいイカも出てきてた、名前はデビルスウィッド、一階で一番強い雑魚モンスターだった筈だ。ってことは・・・

「……、ゲームの世界なのかよ……！」

彼の心は碎ける寸前であった。ここが地球の秘境で、歩いてる内にどこかの村とかに辿り着いて、なんて、心の底に密かに湧き上がっていた淡い希望などが真向から叩き潰されたのだ。ここは異世界<sup>ゲーム</sup>で、地球じゃない。それがわかったとき、起き上がったから今までにため込んで、見ない振りをしてきた不安が一気にせりあがってきた。自分の存在が薄っぺらな2Dではない証明<sup>にせもの</sup>が、この森には無いのだ。なぜならこの森もまた、データによって組み上げられた存在だから。とにかく人に会いたかった。あつて、名を名乗って、自分が嘘の存在ではないことを確かめたかった。話ができるならこの際偽物だろうがデータだろうがかまわない。彼の恐怖は彼という器から水のように滴り落ち、自我という水面を揺らす。だんだんと足元が覚束なくなり、ついに膝を折る。頭を抱えて震える彼が、ついに崩れ落ちようとしたその時、

「きゃあああああああ……！！！！！！」

悲鳴が、静かな森に木霊した。彼は顔を上げると、即座に走りだした。己の、存在証明を求めて。疲労を感じせない矢のような速さで駆ける。インドア派で、体力が無い筈なのに。このときすでに、彼はこの世界に取り込まれようとしていたのだ。とある役割を与えられて。そのことを、彼はまだ知らない。

油断は無かった。大迷宮と呼ばれるこの迷宮は、現在確認されている階層だけでも13階層と多く、大陸の各地に点在する小迷宮とは格が違う。と、何度も聞いたことがあったし、ここに来る直前にも冒険者ギルドの職員から耳にたこができるほど聞かされた。そういうこともあって、入念に準備をしてきていたし、一緒に迷宮攻略にきたギルドメンバー達は、自分を含めて皆初心者ヒキナーだけでも、今日に備えてかなり特訓していたのだ。なのに。

「あ、ひ・・・ああっ、ひい・・・!!」

それなのに、何故全滅してるんだろう。歯を食いしばって後ずさりしても、歯の根が合わず、カタカタという音と堪えた悲鳴が口から漏れる。握りしめている剣さえ、ともすれば滑り落ちてしまいそうだ。怖い、怖い!! 周囲には仲間の倒れ伏す姿。戦士のマリーは麻痺毒を喰らい、殴打されて気を失った。狩人のタイムは、体当たりを喰らって樹に叩きつけられ血を吐き、そのまま気絶した。唯一無傷な仲間の、後ろにいる学者のカトレアは、私より二つ下なのに古代語魔法を使える凄腕だ。なのになぜ魔法を使わないのか。簡単な

こと、私と同じで歯の根が合わず、詠唱できないのだろう。いや、魔法を使おうともできずに震えているのかもしれない。ならば、

「わ、わたし、が。ま、まもら、なきや・・・」

そうだ、私が守らなきゃ、何のために騎士の訓練を受けたのかわからなくなる。皆を守るために厳しい訓練にだって耐えたんだ、だから、

「きゃあああああああああ！！！！！！！！！！」

衝撃と、悲鳴。彼女の覚悟を嘲笑うかのように、敵はその長い触腕で彼女を打ち据えた。かろうじて間に合った大盾による防御を無いものとして扱うかの如く弾き、あまりの衝撃に彼女は悲鳴を上げたのだ。敵の名はデビルスクイッド、触腕による麻痺の一撃と高い攻撃力で森の一階層において生態系の王者に君臨しているモンスターである。そして森の王者は今まさに、自分のテリトリーへと侵入した不届き者に裁きを下そうとしていた。震える侵入者二匹にめがけて己の腕を振り上げ、

「うらあああああああああ！！！！！！！！！！」

暴君は、横合いから猛進してきていた新たな侵入者に吹き飛ばされた。

ひたすら獣道を走り悲鳴の元に近づいてみれば、そこには女の子二人とイカの姿。普通の状態であつたら彼は突つ込んで行くことはなく、傍観に徹した筈だ。しかし、生憎今の彼は普通じゃなかった。最早視界には女の子達とイカのみ。そして、当初の目的は人間との遭遇、対話。つまり。

「うらあああああああああ!!!!!!」

しゃべりたい。しかしイカが邪魔だ。ならぶつ殺す。精神崩壊寸前の彼には理性と怖いものなどなかった。狙いを定めると走りこむスビードをそのままに錆びた短剣を腰だめに構えた、由緒正しき鉄砲玉タツクルによってイカを吹き飛ばし、周囲を見渡す。目についたのは鈍く光る銀。彼は一瞬で判断を下すと

「これ、借りる!！」

「えっ?」

泣きべそをかいている少女の剣を引つ搦んでぶん獲りながら再び疾走。起き上がりつつあるイカに向けて、横薙ぎに渾身の一撃を放つ

! !

「っづあああああああ! ! !」

獣の如き咆哮とともに振り切られた剣はその切れ味を遺憾なく發揮し、森の王者をあつさり一刀両断に伏した。それと共に勢い余った彼はすつころび、顔面強打の後地面を三回転してようやく止まった。しばしの沈黙。

「あ、あのう・・・」

あまりの事態に茫然としていた少女達だが、助かったことには変わらない。内心で安堵の溜め息をつきつつ、イカを屠った青年に慎重に声をかける。すると、顔を抑えてうずくまっていた青年は、パツと顔を上げ口を開いた。

「あ、ああ。何?」

クールぶっている顔を上げた青年からは、たらたらと鼻血が迸っていた。あまりの酷さに少女の顔が一瞬引き曇る。



「・・・あの、お顔は大丈夫なんですか？」

あまりの惨状に騎士が尋ね、それに合わせて学者も首を縦に振る。それに対して大丈夫、と答えた青年は（その割にはまだ鼻を押さえていたが）再び口を開き、

「とりあえず、ここを離れないか？」

と提案。対する二人もそれに乗り、ひとまず迷宮をでて街に向かうことになった。倒れているパーティーメンバーを騎士の少女と青年で背負うと、一向は会話もなく迷宮から帰る道を辿って行った。なにせ、お互いになんと声をかけたらよいかわからなかったのだから。

そうして森を三十分ほど歩けば、迷宮の出口についた。迷宮の入口近くにある衛兵の詰所兼救護所となっている施設に怪我人を運び込むと、一同はほっと、息をついた。すると騎士少女がなにかに気づいたように口を開く。

「そういえば、自己紹介とお礼がまだでしたね。私はオリーブといいます。ギルド《グロリオース》のギルドマスターで、騎士ナイトのジョブを務めています。私達全員の命を救ってくださったこと、深く感謝します。ありがとうございました！！」

オリーブは、騎士に相応しい上品な物腰で、しかし感謝の言葉は念

を押すように力強く述べた。それについて、隣の少女も口を開く。

「カトレア、です。あの、その、あ、ありがとうございます！  
」

それだけ言うと、カトレアはオリーブの後ろに隠れてしまった。どうやら人見知りをする方のタイプらしい。そして次に、青年はようやく当初の目的を達成できるという喜びを噛みしめながら、己の名をこの世界で初めて言い放った。

「俺の名前は三隅<sup>みすみ</sup> 香<sup>こう</sup>だ、コウでもミスミでも、好きな方で呼んでくれ。」

にっこりと笑顔を添えての自己紹介。なにせ、オリーブは綺麗な金髪を頭の高い位置で結い上げている、上品さと活動的な空気を併せ持つ美少女だ。カトレアも、紫のゆるいウェーブのかかったロングヘアに愛らしい顔立ちをした美少女である。人、それも美少女に会えたことでテンションが上がっているため、勢いのままかっこつけて自己紹介したコウだが、残念ながら乾いた鼻血が顔面にこびりつき悲惨なことになっていた。その証拠に、彼の顔を見たオリーブは一瞬怯えたし、カトレアに至ってはすっかりオリーブの背に隠れてしまったくらいだ。それはともかく、ようやく青年はこの世界に名を名乗り、そして人知れず世界は青年を己の一部と認めた。これから彼を待ち受ける運命は如何なる動きをみせるのか。それは、神<sup>せかい</sup>のみぞ知ることだろう。こうして、後の世に未長く称えられるであろう彼の物語は、締まりのない始まりを見せるのであった。

迷宮之巻　かくて迷宮は彼を迎えし。（後書き）

はじめまして、月海つきみのうみと申す者です。初執筆だったので、いかがでしたでしょうか？誤字、脱字、誤用があればこっそり教えて貰えるとありがたいです。はい。それでは、続きをかければまたお会いしましょう。では。

## 迷宮之貳 客人、冒険者となる。

現在、衛兵詰所兼簡易救護室は、混迷を極めていた。原因は三名の人物、うち一人は青年、血塗れの顔をそのままに救護室のベンチに座り込んで青い顔を（実際は乾いた血で蝦茶色だが）して俯いている。もう一人は少女、胸部フレストと腰部スカートを装備した典型的な冒険者だ。こちらこちらも青い顔をしてぶつぶつと

「私のせいで、わたしのせいで、わたしの、」

などと呟いている。超怖い。そしてもう一人は、

「じーーーーーっ」

見てる。こつち見てる、超見てる。助けを求める視線を横顔に感じながら、衛兵派出所、迷宮支部勤務のストック（26歳、妻子持ち、好物、妻の手料理。）は、冷や汗を掻きつつ無視した。だって怖いんだもん、あの雰囲気突っ込むの。ローブ姿の少女の視線を感じつつ、彼はまだ陽が高い位置にある空を仰いだ。ああ、帰って妻と娘の顔が見たい。そう思いつつ、背後の扉が軋む音を聞いて彼は希望を感じた。背後に現れたのは迷宮支部専属の医学者ドクターだ。彼はこの

状況を打破してくれる唯一の可能性に、問いかけた。

「どうでした、負傷者の具合は？」

「なに、たいした治療じゃ無かったよ。イカの傷や毒は一層で壊滅して帰ってくる冒険者の典型的な例の一つだから、治療しなれていい。しかも、イカにやられたにしてはずいぶん傷が浅かったから、夕方までには目を覚ますだろう。」

その言葉を聞いた瞬間、鎧姿の少女がパツと明るくなり、ローブ姿の少女はほっと息をついた。衛兵に福音を告げたドクターはゆったりと歩きつつ肩に掛けていた手ぬぐいを青年に放り投げて、顔をふきたまえと忠告して去って行った。この状況を打開してくれたドクターに対して感謝しつつ、衛兵は、夕方にまた来るといい。と言いつ放ち、陰鬱な冒険者どもを救護所の外へ追い出すのであった。エリカ、パパは頑張ってるぞ。サイネリア、今日は早く帰るよ。愛する娘と妻に念を送りつつ、彼は仕事に戻るのであった。

一方、救護室の外に出た三名は困った顔でお互いを見た。青年、コウは一旦落ち着いたことよって今の自分に起こっている現象について考えていたのだが、あれよあれよという間に日差しの下へと放り出され、考えが纏まらなくなってしまった。彼の推測が確かなら、この世界はゲームの世界だ。名前と職業ジョブを決めた六名のキャラを新生ギルドのパーティーとして、パーティー単位で主人公として扱い進める感じのゲーム。典型的なウィザードリイタイプの迷宮ゲーにおまけ程度のストーリーがついたモノというのが彼の認識だった。が、今に至ってはそんな知識は役に立たなかった。というか役に立ちそうな知識など彼は持ち合わせていない。なにせ、ゲームはこれから進めますよというところで、現実になってしまったんだから。ありえねーよと叫ぶ自分を押し殺しつつ思考を回すが、彼の脳みそは二トを決め込んで一切打開策を提示しなかった。すると、

「あの、そろそろお顔を拭いた方がよろしいですよ？」

鈴が鳴るような声が聞こえて横を見ると、困った顔をした少女、オリーブと目が合った。その横ではローブの少女、カトレアも勢いよく首を振っている。俺の顔ってそんな汚いの？と聞くと、曖昧な笑みが返される。そんな事実にし少し落ち込みつつ、さっきの医者風の男に貰った手ぬぐいで顔を拭くと、即座に手ぬぐいから乾いた音が聞こえた。驚いて手元を見ると剥がれ落ちた血の塊が手ぬぐいに張り付いており、コウは危うく腰を抜かすところだった。そんな彼の様子を眺めつつ、顔があんまり怖くなく、むしろややかっこいいこ

とに安堵した二人組がいたことを、ここに記す。そして、コウがさっぱりしたところで再度オリーブが口を開いた。

「あの、それですね、コウ殿。あなたさえよければ、私達からお礼がしたいので、着いてきて頂けないでしょうか？」

「えーっと、別にお礼とかいいよ、ホント。お礼が欲しくて助けたわけじゃないしね。」

嘘だ。できることならばお礼として助けてほしいのが本音である。しかしそれを先に言わないのは、悲しきかな、日本人の持つDNAが彼に謙遜という行動を取らせているのだ。人間は危機に陥ったとき、日常的な行動を取ろうとする傾向にある。つまりとところこの男、テンパっているが故にこんなことを言い放ったのだ。無論、心中は大荒れである。言語化するならば、

「ふざっけんなあああああああ！マジでありえん、俺ってばイカれてるぜ！！なにがお礼とかいいよ（キリッ）だよ！！死ぬ！俺死ぬ！！ってかほっとしても俺いずれ死ぬじゃん！！！！ジージース！！神様たすけてえ……。」

と、いったところだろう。ちなみに彼は無宗教だ。しかし、彼を救ってくれる神はいて、以外なところから助け舟を出してくれた。

「あの、でも・・・、お兄さん、背囊とか持ってませんよね。服も見たことないモノですし、遠いところから来たんじゃないですか？知り合いが近くに住んでたりするんですか？」

その助け舟とは、カトレアだった。沈黙するコウを見かねて声を掛けてくれたらしい。彼女に続くようにオリーブにも説得されたコウは、内心ほっとしつつも彼女達に従うのだった。ちなみに、謙遜は良い方に捉えられたらしく、二人のコウに対する印象は、又ケてるけどいい人。という風になっていた。本人が聞けば喜びつつ落ち込むだろう。知らぬが仏である。

「なるほど。それで荷物も無しに迷宮にいたのですか。なんとというか、大変でしたね・・・。」



そんな言葉をオリーブに言わせたのは、コウである。目的地である彼女達のギルドに行く道程で、何故裸一貫で迷宮にいたのかを聞かれたコウは、焦りつつもカバーストーリーをでっち上げたのだ。内容は単純なモノで、とある東の小国の出身である彼は、冒険者に憧れてこの国に来たが、悪辣な冒険者崩れに騙されて荷物を奪われ、迷宮に放り出された。そんなときに、悲鳴が聞こえたので駆けつけた。という、微妙なストーリーであった。が、どうやら二人の同情を誘うことには成功した様だ。オリーブはむっとした表情で、許せない、非道な行為です！と居もしない悪党に対して怒りを燃やしているし、カトレアは、お兄さん、元気出してくださいっ！と、涙ぐみつつこちらを励ましてきた。それに対して罪悪感を覚えつつコウが苦笑いをしていると、ふいに宿屋のような建物に着いた。扉を押し開き中に入ると、宿屋の女将らしい恰幅のいい女性が三名を迎えてくれた。

「あら、オリーブちゃんにカトレアちゃん、お帰りなさい！って、あらあら、オリーブちゃんったら財宝じゃなくて男の子持ち帰るなんて！！やるじゃない！！」

「なっ！！ち、違います！コウ殿にはお世話になったからお礼をしようとして連れてきただけですっ！まったく、メイさん？」

「わかったわかった、悪かったね。で、コウちゃんだっけ？あたしはメイ、見ての通りココの女将さ。泊まってくなら後で声かけてち

ようだいよ?」

唐突にオリーブをからって真っ赤にしつつコウに声を掛け去って行った女将。すごい人だと思いつつコウは宿の二階の一部屋へ案内された。部屋にあるテーブルを三人で囲み、腰かけてからオリーブが喋りだした。

「ここに来るまで話はあらかた聞きましたが、そんな事情があるのなら、尚更放って置けません。それですね、コウ殿。提案とお願いがあるのですが・・・」

と、そこまで喋って一息つき、コウの目を見つつ、オリーブは再度口を開いた。

「単刀直入に言います。コウ殿、私達のギルドに入っただけないでしょ?」

「・・・え?」

なんとも以外な展開であった。オリーブは身を乗り出してこちらを見つめているし、カトレアは固唾を飲んで状況を見守っている。とりあえずコウは、理由を聞くことにした。

「なんで、俺を君達のギルドに？それに、提案なら分かるけど、おねがいでいい？」

「それは、あなたが身ひとつで頼れるものが無いということと、冒険者になるのが目的であるということとを鑑みて、です。お願いというのは、そこに私達の事情が関わってくるのですが……」

そこで一旦言葉を切ったオリーブ。その横からやや悲壮な調子でカトレアの声が飛ぶ。

「実は、わたしたちグロリオーサは、人員不足で困ってるんです。」

以外だった。見た目が可憐な少女達がいるのだから、それを誘蛾灯にすればいくらかでも男なら引っかかりそうなモノだが。しかし、揃いも揃って疲れた顔をした少女達は幾分か低い声で話を続ける。

「私達グロリオーサは、今日の探索にでたパーティーメンバーが、そのままギルドメンバーなんです。命からがら帰ってきたことから分かると思いますが、実を言うと全員が初心者冒険者なんです。」

「しかも全員女の子なんです。だから皆から弱そうだと思われて、人が全然集まらないんです。でも！そこでお兄さんが現れた！！」

妙に力の入った語調でカトレアが告げる。お、俺？と、戸惑いつつ返すと、オリーブが深く頷きつつ語る。

「はい、あなたです。私達のパーティーは現在四人。迷宮の道幅などを考えると最大五人程度が普通の冒険者パーティーなのですが、現状では一人足りない。そこに、コウ殿。あなたが入ってほしいのです。人柄は今まで見させて貰いましたが問題ないですし、実力も、不意打ちでしたがあのデビルスクイッドを倒す程にある。しかも、私達に今必要な前衛であるという条件もクリアしている！どうでしょう。ギルドに入って頂けないでしょうか！？」

「わたしからも、お願いですっ！お兄さんなら怖くなさそうだし、それに、お兄さんの困ってる理由も解決できるんだよ？ダメ？」

こちらを見つめる少女達は真剣な眼差しでコウの動向を見ている。おそらく、俺を助けたいという理由と、人員不足という理由はどちらも本当なんだろう。と、そこまで考えてから、コウは思考を手放した。なにせ、最初から答は決まっているのだから。人としてこんなに求められているのは嬉しいし、それが美少女なら尚更。それに、現実的な問題として、無一文の無職では生きていけないというものもある。つまり。

「分かった。俺でいいなら、君達のギルドに入れて貰いたい。」

そういうことである。答えを聞いた瞬間、コウの目の前の彼女達は手を取り合って喜びあい、それを見たコウにも自然と笑みが浮かんだ。それから少し間をおいてから、改めて挨拶をした。

「では、改めて。ギルドマスターのオリーブです。よろしくお願います、コウ殿。」

「パーティーの後衛をしています、セージ学者のカトレアです。よろしくです、お兄さん！」

「ああ、よろしく、二人とも。ところで、質問なんだけど。」

ふと、コウに疑問が湧いた。自分が入ることを仲間に聞いてから採決を取った方が良いのではないかと。それに対する答は、

「いいんです、彼女達もずっと新しいメンバーを探してましたから。」

とのことだった。そうこうしている内に時間は経つもので、太陽はすでに中天から傾き始めている。三人は宿を出ると救護所に向かうことにして、歩き始めたのだった。

迷宮之貳 客人、冒険者となる。(後書き)

おはこんばんにちは、月海苔です。今回は冒険者になる経緯でした。やや冗長だったでしょうか？ちなみに関係ないことですが、キャラの名前は全部植物から取っております。一応ギルド名も。暇でしたら調べてみても面白いかもしれません。と、蛇足でしたね。それでは、またお会いしましょう。では。

迷宮之参 備えあれば憂い無し。

燦然と輝く太陽が照らす石畳は、そこに暮らす人々の生活をその身に刻み、擦り減り、道行く人に歴史を感じさせてくれるような、穏やかな風合いのくすんだ白に染まっている。海に程近いこの街の壁は漆喰で白く輝いており、それが、目が覚めるような青い海や空、時折見える並木の緑をより一層際立たせているようだ。美しい、まるで絵画のような世界だが、そこに一つのエッセンスを加えることよって、良い意味でこの世界は絵画足りえなくなる。それは、何か。

「いらっしやい！！今日は水揚げされてから間もない魚ばかりだから、新鮮でおいしいよ！！今日の昼飯に一匹、今日の晩飯に一匹。ウチの魚を買っていつとくれー！！！！」

「おう、その坊ちゃん嬢ちゃん！！隣の魚屋は大したことないぜ、昨日は売れ残りを自分の晩飯にしてたくらい売れてなかったしな！！その点ウチは鮮度よし、ツヤよし、味よしの野菜がたくさん！！！！今日の晩飯はウチの野菜を使っとくれよな！！！！」

「て、てめえ！！言ったな、この！！一昨日は赤字だなんだって騒いでカミさんにげんこつ喰らってたくせによお！！この、菜っ葉くせえハゲ親父が！！！！」



「い、言ったなこの蛸坊主！！もう我慢ならねえ！！！！今日こそは決着つけてやんよ！！」

「あんたたち、うるさいよ！！客の前でなにやってんの！！！！」

「うへえ、ごめんよ母ちゃん！！！！」

賑わい、である。色とりどりの布を使った鮮やかな屋根に、これまでた色とりどりの商品が並ぶ市場は、美しい街並みに命を吹き込むかのように騒がしく、活気があった。ルピナス小国連合に周囲を囲まれ、しかし独立した国家のように扱われている都市にあるこの街は、大迷宮という人を惹きつけてやまない要素の他にも、とても魅力的な要素の詰まった街である。迷宮都市、ブーゲンビレアの城下街。なお、観光の際は迷宮王ヴェロニカ・ヴィクトリアスの時代に建造され、今もこの街の権威を司る王族が住まう王城を見ていくと良いだろう。君はそこで都市一番の可憐さを誇るといふネリネ・ヴィクトリアス王女を探してもいいし、探さなくてもいい。と、まあこの街に関してはこの様な雑誌などに載っていますので、暇ができれば読んでおくといいですよ。」

そう言って雑誌、『ルピナスうおゝか』春の観光特集』を閉じたのはオリーブだ。救護所に行く前に寄る所があると言うので、目的地までの雑談がてらに街の話をしていたのだが、途中からどこからと

もなく雑誌を取り出し説明し始めたのだ。どうも彼女はこの街が相当好きらしい。なにせ話をしているとときの彼女の目は輝いていたから。途中でハゲ親父どもの喧嘩に遭遇しても動じることなく話していたのを見て、焦りつつコウは二重に驚いた。この世界に雑誌があるということ、オリーブの語る世界観が知っているゲームのものとは少し違ったからだ。コウが知っているこの街の背景事情<sup>せつじ</sup>では、迷宮都市ブーゲンビリアは王政では無かったのだ。まあ、その事實はコウの現状に直接作用するわけではないのですが記憶の底へ沈んだが。この辺りに彼が今までどれだけいい加減に生きていたかが滲みでているが、残念ながら人を疑うことをあまりしないオリーブとカトリアはそれに気づかなかった。それはともかく三人は市場を進み、大きな店の多い場所へ抜け出た。そこで、人混みに流されなように注意し、口数の少なくなっていたカトリアが口を開いた。ちなみに彼女はコウの胸あたりまでしか背が無い。

「やっと抜けました、ふう……。さて、お兄さん。お兄さんはグロリオサに入り、冒険者になりました。ですが、お兄さんには迷宮に挑むにはまだまだ足りないものが多いのです！それがなにか分かりますか？」

「え？・・・うん、き、気合とか？」

バカ丸出しの解答である。しかし、そんな解答にもめげずにカトリアは続ける。

「ズバリ、お兄さんに足りないものは装備です。今の異国の装いで冒険者には見えませんから、装備を揃え、その上で私達の仲間に出会ってもらうですよ。さつきは大丈夫と言いましたけど、実は仲間に一人気難しいお姉さんがいるですから……。」

とのことらしい。まあ、灰色のスウェットパンツと無地のＴシャツで戦う冒険者なんていないだろうからいいのだが、一つ問題があった。

「や、それは良いんだけど、さ。装備ってお金いるでしょ？俺、今お金無いんだけど……。」

つまりそういうことだ。現在無一文で暫くヒモ野郎決定な身としてはこれ以上借金を増やしたくないし、コウの心情としては優しい彼女達に迷惑を掛けたくないのだ。しかし、そんな彼に対してオリブは笑顔で話しかける。

「コウ殿、大丈夫です！実を言うと私達、人は足りていなくても、お金では困っていないんですよ。」

そう言って彼女が取り出したのは巾着袋。その中には大量の銅貨、銀貨、金貨があった。啞然とするコウを差し置いて少女達は本人そ

つちのけでコウに似合う装備を考え、はしゃいでいる。こと買い物という一点において、女は男よりも強い。この法則は、どうやら異世界でも同じらしい。

夕方。街は夕日の赤に染まり、市場も閑散としている。遊びまわる子供たちは家路につき、穏やかな静けさが街を包んでいる中、三人は救護所に向かっていた。

「しかし、装備を整えると人の印象も変わるものですね。先ほどまでのコウ殿は優しげな雰囲気でしたが、今のコウ殿にはこう、凛々しいといった印象を受けますね。」

そう告げたのはオリブだ。満足そうにコウを見ている彼女のプロデュースで装備を固めたコウであったが、見た目にはなかなか冒険者らしさ、とでも言うべきものが漂っている。鉄製の胸部鎧プレストに、黒色の丈夫そうなワイドパンツと同色のブーツで足元を、腕は肘までの革製手甲レザークロップで固めている。腰元には幅の広いベルトに吊るした片刃の長剣があり、より強く彼の冒険者らしさを演出しているように見

える。が、それら全ての調和を崩すかのように表情が死んでいた。なにせ、一時間以上着せ替え人形にされた挙句、武器を選ぶ段階では延々と剣やら槍やらを振らされていたのだから。彼と彼の上腕二頭筋は休息を欲しており、しかし、今のところ望むものは与えられそうになかった。そうして少女二人、半死体一名で歩いている内に救護所へと着いた。そこで直立している衛兵は三人に気づくと一瞬嫌そうに顔を顰め、彼等の中に案内した。救護所内の病室に入ると木製のベットのうえで欠伸をしている少女と、貧乏揺すりを繰り返している少女がいる。二人はこちらに気づくとそれぞれ笑みと顰め面を浮かべた。

「お、お嬢様！……！嗚呼、すいません、お嬢様を守るのがわたくの使命ですので、この様な無様を晒してしまうなんて……！！！！この失態の罰がどんなものであると、タイムめは耐えて見せますッ！！お嬢様、どうか愚かなわたくしめに罰をくださいまし……！！！！」

まず口火を切ったのは貧乏揺すりをしていた方だ。大げさかつ芝居がかった仕草でオリブの足元に縋りつき、苦痛の表情を浮かべている。その情景に苦笑いを浮かべているカトレアとあっけにとられているコウに、声がかかった。

「お、そっちの兄ちゃん是谁なんだ？見た感じ冒険者っぽいけど、どういいう知り合い？」

そうやって近づいてきたのは欠伸をしていた方の少女だ。日に焼けた小麦色の肌に長い焦げ茶色の髪が南国の人々を思わせる美人だ。均整のとれた肢体を皮の胸当てと巻きスカートで包んでおり、腰には何色かの腰布と紐飾りを巻いている。胸下から腰までに布地は無く、括れを強調するような色気のある見た目と裏腹に、口調や笑顔がカラツとしていて少年のようである。そんな彼女の問いに答えるべく、オリーブは足元の少女を引き剥がして話し始めた。

「まずは、全員無事に帰れたことを喜びたいと思います。タイムも、マリーも、傷が深くなかったのは幸いでした。さて、コウ殿、こっちの二人が残りのギルドメンバーです。手前にいる方がマリー、床に座っているのがタイムです。で、こっちがコウ殿。私達を救ってくれた恩人であり、そして・・・」

オリーブはそこで言葉を切り、大きく息を吸ってから口を開いた。

「なんと、グロリオーサ待望の五人目のメンバーになってくれた方なのですー！！！！」

その言葉に対してマリーは喜び、タイムは微妙な表情を作った。そして、彼女はコウを睨みつけて吠える。

「お嬢様！！なぜ、こんな男をギルドに迎えるのです！？わたくしは反対ですわ！！」

その言葉に対してコウは驚いたが、他のメンバーはやっぱりといった顔をしている。そんな中、オリーブはタイムを説得に掛かり、ギャンギャン吠える彼女とオリーブの会話を聞き流しつつ、コウはふと疑問に思ったことを聞いてみることにした。

「なあ、カトレア。オリーブとあの娘って、どういう関係なんだ？お嬢様ー、とか言ってたけど。」

「実を言うとオリーブさんは、さる名家のお嬢様なんです。タイムさんはその従者で、何と云うか、その、すごくオリーブさんのことが好きで、オリーブさんに近づいてくる男の人を嫌ってるんです。それで、何かしら理由を付けてお兄さんを批判すると思ったから先に装備を整えたんですよ。」

そう言うとカトレアは溜め息をついた。どうやらグロリオーサの不足の原因にはタイムも関わっているらしかった。そこへ、オリーブがタイムを伴い寄ってくる。タイムはコウの前に出ると、不満だらけです、といった表情で

「……ハンター狩人のタイム、ですわ。これからよろしく願います。それとお嬢様に手えだしたら容赦しませんから、それだけは心に刻んでおいてくださいまし。」

と告げた。金の巻き毛は豪奢な雰囲気を出しており、口調も相まってオリーブよりどこぞのお嬢様に見える。ただ、そんな印象を裏切るように濃緑の軍服の様な服を着ており、それが彼女の印象を大きく変えていた。そんな彼女に乗っかるようにマリーも自己紹介をする。

「あたしはマリー、前衛でファイター戦士のジョブをしてる。ま、よろしく頼むよー!」

「ああ、よろしく、二人とも。俺はコウ、好きな呼び方で呼んでくれ。」

よろしく、と返してくれたのはマリーだけで、タイムはそっぽを向いている。なるほど、気難しいお姉さんとは彼女のことだったのかと思いつつ、ちょっとだけムツとするコウであった。



とりあえずの自己紹介を済ませ、救護所を出たグロリオーサの面々はメイの宿屋に向かって歩みを進める。太陽はすっかり沈んでおり、しかし、酒場や小料理屋のある辺りはまだ明るい。これは、迷宮から帰ってきた冒険者達が屯しているからだ。そんな一画にあるメイの宿屋の一室で、コウはベットに転がりながら天井を見つめていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

今、彼の中には様々なモノが渦巻いていた。不安、期待、興奮、緊張、そして、疑問。波乱の一日が終わりこうして一人になってみると、やはりこれは夢ではないのかと考えてしまう。どうしても、帰れるのではないかと思ってしまう。しかし、現実<sup>りせい</sup>は彼に残酷な今を示し続けているし、ソレに立ち向かわなければ彼は生きていけない。寝返りを打ち、机の上に置いた剣をじつと見つめる。この世界において、月光に輪郭を浮かび上がらせているソレだけがコウの頼りだった。疲れ切った体は安息の闇にコウを誘い、瞼が落ちる。明日は迷宮に挑むと聞いていたので、早く眠った方がいいだろう。そう判断したコウは、睡魔に身をまかせ、ひと時の休息を得るのだった。

**迷宮之参 備えあれば憂い無し。(後書き)**

おはこんにちばんわ、月海苔です。さんざん迷宮迷宮書いてるのに、三話になっても迷宮に入れません。戦闘なんて一回しかしてないです。うーん。しかし、次回は多分迷宮に入れると思いますので、よろしければ海苔野郎のクドイ文章にお付き合ってくださいまし。では、また次回に。

迷宮之肆 勝利は美酒よりも甘く。

寝返りを打つと、不意に差し込んだ陽の光に眼が眩んだ。思わず閉じていた瞼をさらに瞑り、顔を顰める。安穩とした微睡に身を任せつつ、今日の予定に思いを馳せる。確か今日は大した予定は無かった筈。いや、午後から講義入ってたっけ？じゃあ昼まで寝るかな、とそこまで考えたところで。いつもはカーテンを閉め切って寝るのに陽光が顔に当たるはずなど無いことに気づいた。一気に意識が覚醒し、跳ね起きると。

「……はあ。」

朝一番に口からでた言葉は、特大の溜め息であった。コウの異世界生活は当たり前のように二日目に突入していた。本人の意思を無視して。

宿屋で朝食を済ませ（普通の洋食であった）、グロリオーサのメン  
バーと合流してまずは冒険者ギルドに行くことになった。なんでも、  
迷宮の内部に入り、探索をするのには国営冒険者ギルドの許可証が  
いるらしいのだ。そんなこともしりませんか？とでも言いたげなタ  
イムの視線をスルーしつつ、コウ、カトレア、マリーの三人でギル  
ドへ、残りの二人は探索の準備をすることとなった。朝の活気ある  
市場を通り、装備を買った職人区画を過ぎた所に冒険者ギルドはあ  
った。なるほど、国営の名に相応しい大きさである、とコウは関心  
した。この街では珍しいと言える三階建ての建物は、多くの人が出  
入りしている。そのどれもが武器を下げ、鎧を着こみ、これから始  
まる冒険に眼を光らせて期待している。大学のキャンパスとは違っ  
た活気だ。と、周囲を眺めていたところでマリーに首根っこを掴ま  
れた。

「ちょっと、あんまりキョロキョロしてると変なのに絡まれるよ？」

とのことだった。慌てて伏し目がちに周囲を確認すると、朝から飲  
んでくれている（ギルドの一階は酒場も兼ねている）破落戸風の冒  
険者が数人、喧嘩の相手を探すように周囲を見渡しているのを見て  
冷や汗が出た。あのままだと絡まれていたかもしれない。マリーに  
お礼を言いつつギルド内に入り、受付嬢のいるカウンターに向かう。

「いらっしゃいませ、冒険者ギルドにようこそー！」

「あの、冒険者登録をお願いしたいんですが。」

「はい、冒険者登録ですね？かしこまりました。では、こちらのカードを握って、自分の名前を思い浮かべてください。」

そう言って差し出されたのは一枚の金属製のカードだった。言われた通りに握り、名前を思い浮かべると淡い光が握りこんだ手から出ている。手を開くと、そこには細々とした記載があるカードが出来上がっている。コウにはどういった仕組みなのかさっぱり理解できなかった。

「カードに記載は浮かびましたか？・・・はい、冒険者登録を確認しました。ギルドランクF、グロリオーサのコウ様、ジョブは剣士ソートマンです。これから、がんばってくださいね？」

励ましの言葉と共に手渡されたカードには、自分の顔と所属ギルドが大きく書かれている。裏面には再発行の際には銀貨一枚が必要で、などの、利用に際した注意が書かれている。クレジットカードのようだと思いつつソレをズボンの収納スペースに仕舞うと、後ろから大きな声が聞こえた。何事かと思いい振り向くと、先ほど見掛けた破落戸共が一人の冒険者に絡んでいた。

「おいおい、カタナなんかぶら下げちゃってよう、一端の冒険者気取りかよお嬢ちゃん？」

「……気取り、では無い。私は冒険者だ。」

対峙しているのは二人の人物。一人は飲んだくれの破落戸で、明らかに行き過ぎた酒量を摂取しているのが見受けられる。もう一人の人物は少女、緋袴に太刀を下げている、黒髪の美しい少女だった。周囲を破落戸の仲間が取り囲み囂し立てている中、少女の表情はピクリとも動いていなかった。しかし、それは怯えているからではなく怒りを抑え込んでいる故の風である、気づけなかったのが破落戸共の失敗だった。さらに少女を煽ろうと破落戸が口を開いた瞬間、少女の手元がぶれた。瞬き程の時間が経つと、破落戸は酒場の壁にぶつかり伸びており、少女は何事も無かったかのように立ち去っている。もはや彼女の道を塞ぐ者は居らず、その場にいる誰もが彼女に畏怖の念を向けていた。

オリーブ達とは迷宮前で落ち合うことになっていたので、三人は雑

談をしつつ迷宮へと向かっていた。もちろん、話題は先ほどの少女のことだ。まず、コウが口を開いた。

「しかし、さっきの女の子すごかったよな。こつ、手がぶれたって思ったら破落戸が吹っ飛んでさ。」

「ああ、ありや当然だね。酒場で管巻してる破落戸程度が、冒険者ランクAの人間に勝てるかよつての!」

「そつか。ちなみに、冒険者ランクって?」

「え?」 「え?」

なにそれこわい。ではなく、以外だという表情をしたマリーに変わり、カトレアが答える。少女曰く、冒険者ランクとは冒険者の強さや有能さの目安になる値らしい。迷宮を一階層突破したとか、特別な魔物を狩ったとか、珍しいアイテムの発見とか様々な理由で上昇するらしい。ちなみに、ギルドに加わっている冒険者は個人のランクではなくギルドのランクがカードに表示されるんだとか。ぼやっとした表情で聞いているコウだったが、ふと疑問が湧いた。

「冒険者ランクのことは分かったけど、さっきの娘のランクを知っ

てるのはなんでなんだ？」

ああ、それは・・・と、マリーが口を挟む。

「有名人だから。この一言に尽きるね。さっきの破落戸は知らなかったみたいけど、《首切り》ヒナギクって名前はこの街の冒険者なら誰でも知ってるもんなんだ。」

「へえ・・・。」

あんな美しい少女にそんな物騒な名前があるとは・・・。と、戦慄するコウだった。どうやらこの世界では見た目なんて信用に値しないようだ。そんな会話をしていると、いつの間にか迷宮前に着いていた。こちらを見つけたオリーブが小さく手を振っている。合流し、各々にアイテムを配分しつつある程度の作戦を決める。コウは傷を回復させるポーションを二本受け取った。鮮やかな緑色の液体は現代日本人としては健康被害が気になるところだ、着色料的な意味でまあ、ファンタジーだから大丈夫だろうけれど。そんなことを考えつつ隊列を組む。前衛はコウ、オリーブ、マリー。中衛にカトレア。後衛にタイム。といった、矢印型の隊列だ。これには勿論意味があり、中衛のカトレアを前衛で守り、タイムが敵の足を止めてからカトレアの魔法を命中させるといった作戦だ。ちなみにタイムは背後からの急襲を警戒する役割も持っている。お嬢様の背中はずたくしが守りますわ！と、当の本人は張り切っていた。



迷宮の道は広く、美しい自然と背の高い木々が醸し出す荘厳な気配が人を不思議な気分誘う。警戒をしつつ進む一行は、不意に足を止めた。右手前方の茂みに怪しげな動きを察知したからだ。盾を持つオリブが前に出て剣を抜くと、茂みから人間大の影が飛び出してきた。ソレは触腕をくねらせつつこちらに向かってくる。オリブは自分の頬を伝う汗を感じた。前回は緊張して碌に抵抗できなかったが、今日は違う。大きく息を吸うと、気合と共に声を張り上げた。

「作戦開始ッ!!!」

声に反応して飛び出したのはマリー、両手に握った槍を鋭く突き出し、イカを脇から刺すと即座に後退する。マリーの動きに一拍遅れてイカの腕が地を叩き、土くれが周囲に散らばった。意識がマリーに逸れたのを感じると次にコウが飛び出した。その動きに対してイカが腕を薙ぐが、コウは大きく飛びのいて回避した。そこに、

「はあああああ!!!」

咆哮と共に盾ごと突進したオリブのチャージが炸裂した。鈍い音と共に倒れたイカに対して風切り音を伴った矢が刺さり、その腕を地に縫い止める。タイムの弓撃によって身動きのできないイカがもがく中、朗々と聞こえてくるのは詠唱だ。

「鉄と大地で火花を散らせ、其は紅きもの、揺らめく陽炎！」

カトレアの手に握られた杖の先に赤い光が灯り始める。ソレは次第に膨らみ、輝き、

「汝、焦熱の刃！フレイム！！！」

解き放たれた。指向性を持った炎の刃はイカを包み込み、一瞬で焼きイカと化した。食欲をそそる香ばしい薫りが立ち昇り、辺りに広がりは始める。オリーブは剣を収め、グツと手を握りこんだ。そう、自分達はあれほど苦戦した相手に勝ったのだ。無傷で。その場の全員が勝利に喜び、怪我無く勝てたことに安堵するのだった。一方コウは、自分が全然活躍していないことに密かに落ち込むのであった。

初勝利から数時間、グロリオーサの面々は探索を切り上げ、帰路についていた。それぞれが疲れを見せつつも満足そうな表情をしている。そんな中、コウは難しい顔をして考えこんでいた。探索の途中、

何度かモンスターと遭遇し、戦闘したのだが、その時に疑問が湧いたのだ。自分はこんなに身体能力が高かったか、と。コウは大学に入ってからはずっと運動に縁がなかったため、体力は落ち気味だった筈だ。それが、この世界に来てからは妙に体力があるし、腕力だって剣を容易に振れるくらいにはある。何かしらの補正があったとして、その正体は一体何なのか、そこまで考えて、コウは思考を放棄した。思考していられる状況ではなかったからだ。

「え、ちょ、あの、マリー、さん？」

「んー？つれないね、マリーって呼び捨てでいいよ、一緒に戦った仲だろ？あたしもコウって呼ぶしさ！それよりコウ、あんたなかなかやるじゃん！さっきのダンゴムシの時も、」

「いや、そうじゃなくて、」

胸が当たってるうつつうつつうつつ！！と、コウの脳内は肩を組んできたマリーの偉大なる双丘に全身全霊で意識を裂いていた。その様子を見て取ったマリーは、

「ん？ああ、これ？大きいっしょ？でもねー、鎧で見えないけどオリーブもなかなかのモノ持ってるよ、気になる？気になっちゃう？」

嬉々としてからかい始めた。それを聞いて真っ赤になったオリーブ

はマリーの名を怒鳴りつつ追い回し、カトレアは己の胸元を見て落ち込み始める。タイムはここぞとばかりに冷やかな視線をコウに突き刺してくるし、散々である。だが、

「楽しい、な。」

そう、楽しい。こちらの世界にきてから今までで、ようやく肩の力が抜けたような気がする。このメンバーと居れば、見知らぬ世界も楽しく生きられそうだ。心に温かいものを感じつつ、コウは真っ赤になっているオリーブを宥めにかかり、平手打ちをもらうのであった。最後まで締まらない男である。

迷宮之肆 勝利は美酒よりも甘く。(後書き)

おはにちばんわ。月海苔です。やっと迷宮に入れましたよ！戦闘もしたよ！えらいもっさりした戦闘でしたが。ここまで(四話まで)が序章、プロローグみたいなもんで、説明っぽい文が多かったです。ここからは多分サクサク行けると思います。多分。それでは、また次回に。

## 迷宮之伍 汝、恐るるべからず。

風切り音と共に、目の前数センチのところを触腕が通過する。背筋がゾクリとし、腹の底に重いものが落ちるような感覚を覚えながら握りしめた剣を振るう。腕に鈍い感触を感じながら、コウは全身の力で剣を振り切った。勢い余ってよろめきつつも振り返ると、そこには事切れたイカの死体が転がっていた。ほっとしつつ周囲を見渡すと、そこには最後の敵にとどめを刺したオリーブの姿があった。オリーブはこちらの視線に気づくと周囲を見渡してから警戒をタイムに頼み、イカの死体を漁り始めた。コウは最近知ったのだが、冒険者の収入は殆どがモンスターの死体から出る素材を売ったモノなんだとか。財宝なども収入になったりはするが、発見できるのは極稀なことらしい。大迷宮と呼ばれるこの迷宮は五階層あたりまでは探索され尽くしており、そこから先は一部の屈強な冒険者やギルドしか立ち入っていないとか。つまり、一から四までの階層でお宝に有り付く可能性はほぼ無いのだ。なんとも夢の無い話である。と、コウがつらつらと無駄なことを思考している間に剥ぎ取りは終わったようだ。オリーブを先頭に再び探索を始めるグロリオーサの面々。

「さあ、あと少しで下層へ降る階段がある広間に着きます！気を抜かずに行きましょう！」

オリーブの号令の下、周囲を警戒しつつ進むと大きな広間にでた。木々に囲まれた空間にポツリと現れた石畳の広間は過去にどのよう

な経緯で朽ちていったのだろうか。考古学者であるカトレアによると、大迷宮は高度な魔法文明の遺産である可能性が高いらしい。カトレアの使う古代語魔法も、元は迷宮から見つかった古文書にあったハイ・エンシェント上位古代語魔法を扱いやすくダウングレードしたものだとか歴史や魔法について語るカトレアは非常に楽しそうで眼福だったのをコウは覚えている。傾向は違えど平均以上の美少女に囲まれて一週間ほど。考えごとをしつつ迷宮を歩けるくらいにはコウはこの世界に馴染んできていた。

「あつた、あつたですよー!!!」

カトレアの嬉しそうな声に振り向くと、そこには幅広い階段と手を振るカトレアの姿があつた。全員が階段近くに集まり、タイムが地図に階段を書き込む。彼女はこういった細かいことを進んでやっていることが多い。ギルド単位での資金管理をしているのも彼女だ。タイムが地図を書き終わると、今日の探索を終えることになった。なんでも、二階層からは少々準備がいるらしい。名残惜しそうにしつつも帰還するグロリオーサの面々であつた。

「・・・はい、一階層の探索終了を確認しました。これでグロリオサのギルドランクはE、所属されている冒険者の方の個人ランクもEになりました。このランクからは国営冒険者ギルドより斡旋されるクエストを受けることができます。クエストは本館一階の掲示板に貼り付けてありますので、そこから期日までにできるクエストを剥がしてカウンターで受領してください。また、クエスト達成の際もカウンターにて報告を行ってください。クエスト達成の確認と引き換えに、こちらで預かっている報酬をお渡しします。」

国営冒険者ギルドは今日も賑わっている。探索が午前中で終わったので、今はギルドランクの更新ついでに昼食を食べようと、コウ、オリーブ、タイムの三人で外出していた。カトレアは迷宮について論文を書くとかで宿で留守番をしているし、マリーは釣りに行くんだとか。気候が温暖なブーゲンビリアでは魚や果物がおいしいらしく、今日の晩飯を一品増やしてやる！と男らしいセリフと共に釣竿を担いで港の方へ行ってしまった。そして、今に至る。オリーブがカウンターでランクアップの申請をしているなか、コウは気まずくてしかたなかった。一週間ほどこちらで過ごして、グロリオサの面々とは結構仲良くなったとコウは自負している。しかし、一人だけ仲良くなれない人物もいた。

「・・・なんですの？じろじろ見ないでくださいまし、汚らわしい。」

タイムだ。今も目が合っただけでこの言われよう、これでは仲良く



など到底無理である。コウが加わった当初も反対した彼女は、一週間ずつとこの調子なのだ。微妙な空気の中、満面の笑みを浮かべたオリーブが戻ってきた。オリーブが戻って来ると途端にタイムは機嫌が良くなり、ほっとしたコウであった。そのままギルドの一階で昼食を済ませたコウ達は、二階層へ進むために必要な準備をするために職人区画まで来ていた。途中の市場で買った串焼き（何の肉かわからない）を食べつつ、ゆっくりと街を歩く。これから何を買うのか気になったコウはオリーブに尋ねてみることにした。

「なあ、オリーブ。二階層に行くための準備って、どんなものなんだ？」

「ああ、準備と言っても、大したことではないんですよ。」

オリーブは串焼きを齧りつつ続ける。食べ歩く姿さえどことなく優雅に見える彼女は、頬に付いたソースに気づかず続ける。

「二階層からは、道が暗いらしいのです。それに、一階層のような生きているモンスターに加えて、アンデットと分類される屍に寄生するモンスターが出てくると聞きました。この手のモンスターは直接的な攻撃に強く、魔法で倒すにしても今のパーティーではカトレアにはかり負担が掛かります。ですが、アンデットにも弱点はあります。」

そこで言葉を切り、オリーブは近くの冒険者用の雑貨を扱う店に入  
って行った。後を追うと、彼女はカンテラを持ってこちらに振り向  
いた。

「アンデットは、光に弱いのです。日の光が一番効くのですが、炎  
の明かりでも十分効果があります。アンデットが光に弱ったところ  
を叩けば、恐れることはありません！」

キリツとした表情で宣言したオリーブだが、頬のソースは付いたま  
まである。彼女の頬は、ソレに気づいたタイムがそつと拭うまで味  
付けされたままであった。

夕方。日が暮れてオレンジに染まる街を歩きながら、コウ達は宿に  
向かっていた。とりあえずカンテラとたいまつ、予備の火口箱など  
を購入したあと、いくつか店を回って薬品なども補充していたら日  
が暮れていたので、少し急ぎ足で宿に向かっている。夜になると、  
この街は治安がいいとは言えないからだ。破落戸や冒険者の中でも  
悪質な方の者は、夜になると活発に動き始める。そういう輩に絡ま

れると碌なことにならないのは分かり切っているので、道行く人々も早々に我が家へ急いでいる。宿に着くと、厨房から食欲をそそる匂いが流れてきた。宿の女将であるメイが作る料理はなかなかおいしい。食堂のテーブルに着いて暫くするとグロリオーサのメンバーが集まってきて談笑しつつ食事をとる。この街の料理は洋風で、地球で言うならイタリア辺りの料理に近い。が、やはりそこは異世界、と言うかゲームの世界。コウは今までに見たことの無いようなモノを何回か食べたし、それらはいずれも感じたことの無い味だった。これから時が経つと日本食が恋しくなるのだろうか、と考えるつ料理に舌鼓を打つのであった。

翌日。コウ達は歩きなれた一階層を進み、階段の広間まで来ていた。隊列を組み慎重に階段を下りる。二階層は薄暗く、石で組まれた壁や道は所々が苔むしている。奥まった場所は目を凝らしても見えないくらいに闇に包まれており、階段から射す光がこの階層で最後の日の光であるようだ。カトレアが持っているランテラに日を灯すと、暗い道を進んで行く。次第に階段は離れて行き、ついにランテラの光だけが頼りになった。道は迷路のように入り組んでいて、タイムも地図が描きづらいようだ。進行速度を弱めて慎重に進むと、奇妙な音が聞こえ始めた。思わず全員が立ち止まり、耳を澄ませる。湿った重いモノを引きずるような音と共に、ソレは現れた。

「オオオオ・・・オオオ・・・」

空気が抜けるような異音を発しながら現れた影に向けて、カトレアがカンテラを掲げた。カンテラの灯に照らされ動きを止めた影の姿に、全員が硬直した。腐敗し、異臭を放つ体に剥き出しになった骨が見える。眼窩は空洞で口は大きく開きっぱなしになっている。いわゆるゾンビというヤツだ。コウが顔を引き攣らせつつ他のメンバーを見ると、全員壮絶に引き攣った顔でゾンビを見つめていた。コウが口を開く。

「オリーブ、戦略的撤退だああああ！！」

「許可します！！総員撤退iiiiiiii！！！！！！」

叫ぶように撤退命令を出しつつ華麗にUターン。グロリオーサのメンバーは全力疾走で階段まで逃げるのであった。

撤退から十数分後。探索を再開したグロリオーサの面々は、異様に周囲を警戒しつつ進んでいた。少しでも物音がすれば全員が音の方向へ武器の切っ先を向ける程の慎重さである。暫く進んで小部屋の

様な場所に出ると、再び湿った異音が聞こえてきた。瞬時に戦闘準備を済ませて音の出所に向きあう。が。

「あの、オリーブ、マリー、なんで俺の後ろにいるの？君達もうちよつと前が定位置じゃなかったっけ？」

コウが冷や汗を掻きつつ問うが、問われた両者は引き攣った笑顔で、

「コウ殿、気のせいですよ、恐らく。何時もより暗いところだからそう見えるのです。多分。」

「いやー、気のせいだと思うよ？それに、あたしの武器って槍じゃん？だから間合いの関係で一步下がらなきゃだし？」

などと言っている。そうこうしている内にゾンビは近づいてきており、コウは泣きそうになりながら剣を抜いた。へっぴり腰でカントテラを突き出すカトレアは頼りにならないだろう。タイムの方を見ると弓を構えてはいるが、明かりの弱さ故か狙いをつけにくそうだ。コウは前方に向き直ると大きく溜め息を吐いた。軽く息を吸って剣を腰溜めに構え、ゾンビが近づき光に眩むのを待つ。狙いは一瞬、怯んだときを全力で斬り飛ばす。一步、二歩、三歩、今！！

「うあああああああつ！！！！」

ほとんど悲鳴のような雄叫びと共に、コウは全力で剣を振るつた。床に靴底を叩きつけるようにブレーキを掛け、独楽の様に回転を加えた一撃は、ゾンビを真つ二つに斬り飛ばした。二体目のゾンビが緩慢な動きで襲ってくるのを大きく避けると、そこに矢が飛んできた。合計二本の矢は空を裂いて飛び、一本はゾンビの腹に、もう一本は外れて闇に消えた。矢が刺さつた衝撃でゾンビがくの字に折れ曲がる。そこに大音声を上げながら飛び込んだのはオリーブだ。

「ふえあああああ！！！！」

微妙に情けない叫び声と共に突進し、大盾を叩きつける。そこに後を追つたマリーが飛び込み、頭部に叩きつけるように槍を振るつた。泥を叩いた様な不快な音と共に頭部が潰れ、ゾンビは動きを止めた。即座に全員が死体から離れ恐々と観察、動きが無いのを確認してほつと息を吐いた。たかだか一回の戦闘で大きく体力を使った様な気がして、コウ達は虚ろな目をしつつ闇の深い二階層の道を睨むのであつた。

迷宮之伍 汝、恐るるべからず。(後書き)

おはにちばんわ、月海苔です。迷宮探索もどんどん進みます。二階層は地下墓地なイメージで書いとります。実際ゾンビとか出てきたらボクは失神してガブリといかれる自身があります。ではまた次回。

## 迷宮之碌 剣閃、烈火の如く。

薄暗い空間、湿った空気が辺り満ちている中をグロリオーサは進む。全員が一樣に疲労した様子を滲ませているのは、先ほどから数回あった戦闘の所為だろう。踏破され尽くして情報が暴き尽くされた階層では犠牲者が少なく、死体もほぼ無い。よってゾンビの数も少ないと踏んでいた面々だが、その予想は正しく、そして間違っていた。確かにゾンビは少ないのだ。ゾンビは。一方で肉が完全に削げ落ちて骨だけになったスケルトンや、死肉を喰らうオオネズミなどは多く、それらとの慣れない空間での戦闘で一行の精神はほとんど削られていた。特に、矢面に立って攻撃を受ける前衛三人が疲弊しており、現在は戦闘を避けつつ出口である階段に向かっているところだ。

「はあっ……。このまま、何も無きやいいけど。」

思わずそう呟いたのはコウだ。彼はゾンビの様子に怯む前衛の為に率先して敵に突っ込んでいった結果、かなり疲弊していた。その所為で思わず、といったふうに漏れた溜め息だったのだが、それに噛みつく者が一人。

「あら？溜め息なんて吐けるくらいに緊張感が無いのですね。あなた一人ならともかく、わたくし達まであなたの油断に巻き込まれた



らどう責任を取って下さいますの？」

嫌味つたらしい口調でそう言ったのはタイムだ。用いる武器が暗がりでは不利になる所為か、先ほどから矢を外す度にイライラしている。コウは彼女の苛立ちが自身の不甲斐無さからくるものだとして理解していたし、軽い共感の様なものを覚えていた。自分もこの世界に来てすぐの時は全然パーティーの役に立てなくて密かに落ち込んだのを覚えている。だから彼はタイムを穏やかに宥めるために自分の苛立ちを我慢して笑顔で返事をした。

「ごめん、確かに油断してたよな。これから気をつけるよ。」

「・・・素直すぎてキモいですね。」

コウは自分の血管が切れる様な音を幻聴した。引き気味で嫌悪感を全面に押し出した様子のタイムに言い返そうと口を開いたところで

「え？」 「この音、何ですか？」

なにかのスイッチを入れる様な音を聞いた。音の出所を視線で探ってみれば。

「あ。」 「え？」



「お、タイ「馴れ馴れしく呼ばないでくださいまし。」・・・君もカトレアみたく、魔法が使えたんだな。」

「これはただの魔術ですわ。魔術には戦闘に耐え得るような威力の術はありませんし、使用はほぼ日常的な要素で占められています。まあ、田舎者の貴方にはシヨボイ明かりの術でさえ物珍しいのでしようけど。」

そう言つてタイムは立ち上がった。立ち上がる瞬間さえ顔を顰めつつコウをバカにする彼女に対して、コウは怒りより呆れを覚えた。それに、こちらででつち上げたコウのカバーストーリーでは実際彼は田舎者なのだから仕方ない。溜め息が癖になりそうだと思いつつも彼は松明に火を着けるのだった。それから暫くの間探索して見たのだが、驚くほど敵に遭遇しなかった。不気味だと思いつつも好都合であったから、コウとタイムの即席パーティーは微妙に距離を開けつつ歩き回った。無言で歩く気まずい雰囲気の中、唐突にタイムが口を開いた。

「・・・めんなさい。」

「え?」

タイムの言葉をあまりよく聞き取れなかったコウが聞き返すと、タイムは急に俯いていた顔を上げ、真っ赤になって喚き散らした。

「ごめんなさい、と言いました！！わたくしの不注意で罫に掛かったことをお詫びすると、そういう意図で話しました、よろしくって！？」

「え、ああ・・・なんか、ごめん。」

「ど、どうして貴方が謝るんですの、理解できませんわ、まったく・・・。」

その場に微妙な空気が漂う。コウは彼女が素直に謝ったことに驚き、彼女はコウがいつになく怒らないことに調子が狂うのを感じた。ここ最近やたらと小競り合いを繰り返していた二人はそれぞれ相手が厄介な舌鋒を振るうことを知っていたし、それは迷宮でも変わらなさと知っていた。しかし、暗闇に二人きりで取り残されてからはお互いが相手を気遣う仕草をして、それに両者が驚くということが多くなった。喧嘩相手の見せる以外な一面にお互い調子が狂いつばなしなのだ。結局再び無言になり、探索を続ける二人。そんな中、次に口を開いたのはコウだった。

「そ、そうだ、さっきのだけど、ホントに悪いと思ってるなら、一個質問に答えてくれないかな。さっきの失敗はそれでチャラってことで。どうか？」

「・・・まあ、構いませんわ。この状況に貴方がいるのはわたくし

の所為でもありませんし。・・・破廉恥な質問したら殺しますわよ？」

だがそんな質問するか！と半眼になってタイムを見つつ、疑問に思っていたことを口にする。それは、

「どうして君は男が嫌いなの？」

この一言に尽きる。彼女はただオリーブに近づく男を嫌っているように見えて、その実大して関係のない一般の男性すら顔を歪めて避ける。コウはそれが一体それはどんな理由から来ているのかを聞いておきたかったのだ。今後の為にも。すると彼女は気が進まなさそうに喋りはじめた。

「別段、深い理由ではありません。ただ、わたくしの養い親であった男に殴られて育ったという、それだけの理由ですわ。」

その言葉に、コウはかなり驚いた。彼女はかなり込み入った半生にも、それを少しの借りを返すためだけに話してくれた彼女にも。再び何とも言えない空気が二人の間に立ち込め、無言で歩みを進める。すると、硬いものを床にぶつける様な音が近くなってきたことに気づいた。二人は顔を合わせると、音のした方向に走っていく。前方は小部屋のように膨らんだところであり、彼等は迷いなくそこに飛び込んだ。そこには、

「カタカタカタ・・・。」

スケルトンがいた。しかも、錆びた汚い剣を持って、頭をボロボロになった兜で守っている。そいつの名はスケルトンナイト、剣の扱いを死体の記憶から学んだ厄介なモンスターである。ちなみに、アソッドは高位のアソッドになる程人間に近くなり、中級を超えると人間を軽く超越し始めるらしい。松明を地に置くと共にカトレアの説明を思い出し、即座にコウは剣を抜くと斬りかかってきたスケルトンナイトを止めるために剣を合わせた。しかし、金属がかち合う鋭い音と共に、コウは後ろに押し込まれそうになった。骨だけの体のどこにコウを押し切るほどの膂力があるのかは知らないが、ひとつ、コウにも理解できたことがあった。このままだと、やられる。タイムにアイコンタクトを送り、彼女がそれに頷くと同時に渾身の力で腕を跳ね上げた。カタカタと揺れる骸骨を後目に二人は暗闇を走り始めたのだが、どうにもタイムの様子がおかしい。段々と失速していく彼女を不審に思っていると、彼女は不意に走るのを止めた。

「おい、どうしたんだよ!? アイツ、もうすぐそこにまで来てるんだぞ!」

「・・・着地の時に足を挫いた所為か、もう走れませんの。わたくしはいいから「ちょっとごめん」!」

タイムの言葉を聞いた瞬間に彼はタイムを抱え上げて走りだした。汗だくになって走る彼にタイムが嘔みつく。

「いい加減にしないで！！冒険者になつたばかりの貴方が、足手まといを抱えたままアレを撒けると思いますの！？」

「だ、いじょうぶ、だって、」

「なにが大丈夫ですの、貴方もう息が切れてるじゃない！！わたくしが嫌いなんでしよう、放っておけばいいじゃない！！！！！」

喚くタイムの頭を掻き抱くように胸に寄せて、コウはひたすら走る。正直に言うと、この女は嫌なヤツだと思っていたし、実際そう感じる場面も多かった。それでも。

「いく、ら、きら、いでも。死なせる理由には、ならねえだろうがよおおおおお！！！！！」

ほとんど絶叫に近い声を上げて自分を叱咤しつつ、コウはこの理不尽な状況に怒りを感じた。なぜこんなところで自分が、彼女が死ぬような目に合わねばならないのか。彼女の半生の一部を聞き、彼女が喧嘩相手のために、嫌いな男のために自分を犠牲にするような真似をするのを見て、コウは彼女のことを嫌いでいられなかつたし、守りたいとも思った。酸欠で回らない頭はむやみやたらと足を動かさず、気づけば袋小路に追い込まれていた。茫然とこちらを見やるタイムを背に庇い、コウは剣を抜いた。口には出さずとも、君を守る

と、その背中が語っていた。遠くから着実に迫る硬い音を聞きつつも、コウは精神を集中した。勝算の無い戦いに身を投じようとしている彼は、ふと閃きを感じた。ここに落ちた時の会話が不意に思い出される。確かあの時、タイムは魔術のことを日常的に使用されると言っていた。ということは、それは万人にそれを扱う下地があると解釈しても間違いないだろう。つまり、魔力。もしくはそれに近い何か。誰しもに存在するのだ。なら。

それを、どんな形でもいいから体外へ捻り出してやれば、あるいは逆転の一手が見えて来るのではないか。コウは敵を目前にして目を瞑り、敵は変わらず距離を詰めてくる。タイムは彼が勝つために集中しているのを感じとり、固唾を飲んでそれを見守った。骨のぶつかる音だけが響く中、コウはゆらりと剣先を下げ、体を半歩前に出した。スケルトンナイトはそれに構わず、手中の錆びた剣でコウに躍り掛かった。瞬間、時間が止まったかのような錯覚を覚えるほど、事はゆっくりと進んだ。錆びた鉄塊が迫る。己の指が剣の柄を握りしめる。誰かの息を呑む音。意識が白熱する。そして、

歯車の回るような音を、確かに聞いた。



「っ、はあっ！！！！！」

引き絞った鋭い声と共に、闇を斬り裂いて焔を纏った剣閃が弧を描く。錆びきった剣を払い飛ばし、返す刃で眠れぬ死者を一刀両断に伏した。鮮やかなその軌跡に、タイムは少しの間意識を奪われた。伏した骸が風化し、消え去るのを見届けると、コウは陽炎を纏う己を見やり、剣を収めたところで尻もちを突いた。特大の溜め息が口から漏れ出て、それを聞いたタイムがクスリと笑うのをみて、コウも微笑んだ。

それから、二人はふらふらと歩いているところを探しに来た他のメンバーに見つかり、それぞれに軽いお叱りと無事でよかったという言葉を貰いつつ（カトリアには盛大に泣かれて焦った）、迷宮の外へ帰還するのだった。

翌朝。コウは背伸びをしつつ顔を洗いに井戸に向かう。最初は冷たい井戸水に肝を冷やしたのだが、最近はずつぱりと目が覚めるので気に入っていた。顔を洗い、すぐ脇に置いていたタオルを探すと誰かにタオルを差し出される。礼を言っただ顔を拭き、面を上げるとそこにはタイムが立っていた。おはよう、と挨拶をするが、彼女は何も喋らない。焦れたコウが口を開こうとすると、機先を制するようにタイムが口を開いた。

「き、昨日はありがとう！！後、わたくしのことは名前で呼ぶことを許可します！！」

それだけ言うと彼女は真っ赤になって走り去って行った。残されたコウは空を見上げ、それから朝食を摂ろうと食堂に向かった。今日は、いい日になりそうだ。理由もなく、そう思った。

迷宮之碌 剣閃、烈火の如く。(後書き)

おはにちばんわ。月海苔です。今回を一言で言うなら、『ベタ』の一言に尽きますね。後、展開早すぎ、でしょうか。でも、こう、王道的な展開って、来ると分かってても燃えますよね。そんな加減を表現できたらなあと思いつつ、また次にお会いしましょう。では。ちなみに、タイムはデレたように見えてデレてません。仲が多少よくなっただくらいですあしからず。

## 迷宮之漆 金は天下の回り物。

「・・・はい、二階層の探索終了を確認致しました。おめでとうございます、これでグロリオーサのギルドランクはD、所属されている方のランクもDとなりました。これからもこの調子で頑張ってくださいね？」

そんな言葉と一緒に、ランクを更新したカードが手渡される。オリーブはソレを受け取ると、溢れそうになる笑いかみ殺そうとし、失敗してグフツとか、グハツという様な奇怪な笑い声を上げた。周囲が彼女を遠巻きに見ているのにも留めずにニヤつきながら一つのテーブルに近づいて行く彼女の目線の先には、期待を込めてこちらを見つめる仲間達がいた。そんな彼女達に対して、オリーブは零れんばかりの満面の笑みで口を開いた。

「本日、我らがギルド『グロリオーサ』は、ランクアップを果たし！ランクDになりましたッ！！」

その言葉に、全員が程度の差はあれど喜びの感情を示し、その様子を見てオリーブも自分の主宰するギルドの成長を改めて喜んだ。紆余曲折を経てギルドを結成し、メンバーを5人集めてから今まででおよそ一ヶ月と少し。新人のみのギルドとしては以外な程早いペースで、グロリオーサは迷宮を踏破していた。コウとタイムが落とし穴の罠に嵌り、無事に帰還してからというものの、二階層の探索は

かなり早くなった。アンデットや暗闇での戦闘に慣れたというのも大きかったが、やはり一番大きかったのはコウの成長だろうか。ギルドの黒一点である彼はいつの間にか魔力を剣に纏う技術を身に付けてから、アタッカーとしての能力が格段に増していた。今ではこのギルドに欠かせない人物である。まあ、オリーブにとっては全員が欠かせない人物なのだが。ともかく、お祝いの意味を込めて少し高い料理を食べつつ今後の計画を立てることにして、彼女はウエイターを呼んだ。

食後。彼女達は顔を突き合わせて悩んでいた。悩み事の原因は勿論、現在全力で進めている迷宮の攻略についてだ。現在、十三階層ある大迷宮は四階層までを探索され尽くしており、それ以降の階層はトツプクラスの実力を持つギルドやギルドに所属しない一匹狼な実力者達が探索を進めているところである。では、なぜその階層の数が知られているのか。それは単純に、最下層まで潜った者がいたからである。

迷宮王ヴェロニカ・ヴィクトリアス。彼は王家に二男として生まれ、しかし兄の母親が庶民の生まれだったために第一継承権を持っていた。彼は兄に妬まれて育ち、父王の没後には継承者争いで妾腹の子である兄に追われ、僅かな手勢と共に古くから存在していた大迷宮へ逃げ延びた。そこで彼は追っ手から逃れるために迷宮の深部へ潜り、最下層にてとある“力”を得たとされている。その力でもって彼は兄王に挑み、彼の王の暴虐に耐えかねた勇士達と共に終には王軍を打ち破り、兄王を討ち果たして王の座に就いたのだとか。この話については色々な仮説が入り乱れており実像ははっきりとしない

が、どの歴史書にも変わらないことがある。それは、迷宮の階層は十三階層あること、迷宮の深部には何かがあるということだ。その何かを求め、今日まで冒険者達は探索を続けている。また、迷宮が探索され始めた頃はお宝や強力な武器、危険な魔法を記した魔導書などが多数発見されていたので、そちらを目当てにする者も少なくなかった。というか、曖昧な“何か”よりもソチヲを求める者の方が多かつたらしいが。

それはさておき、長年に渡る探索によつて、迷宮には現在に至るまでに探索され尽くした階層が多い。これからグロリオーサが挑む三階層もその一つだ。オリーブが静かに話し始める。

「次に私達が挑む三階層は、情報によれば地底湖が近くにあるためか通路は浸水しているところが多く、洞窟のような造りの為か非常に滑りやすいとのこと。また、夏場においても冷え込むらしく、環境に対しての対策が必要な様です。その準備の為に、資金集めを行いたいと思います。ではタイム、説明をお願いします。」

その言葉を聞いて、はいっ、お嬢様！と異様に張り切った声で返したタイムは懐から紙を取り出し、読み上げ始めた。それは、探索に使った備品の値段であったり、最近返し終わったコウの装備代であったり、今食べた料理の値段であったり。ひとしきり読み終えたタイムは、手元のグラスから水を飲むと再び口を開いてある額を呟いた。

「……今読み上げたのは、今日に至るまでにギルドで使った出費

の総額ですわ。そして、この金額は見事に収入と相殺されています。この意味が、分かって?」

「つまり、差し引き無し<sup>イーブン</sup>ってことだろ?よかったじゃないか、借金なくてさ!」

冷やかなタイムの言葉に対し、笑顔を浮かべて返したのはマリーだ。パエリアのような海の幸がふんだんに入ったご飯を食べつつ、スプーンを左右に振って得意げな顔で言っただけのマリーに対し、タイムの目尻が瞬時に吊り上がった。

「ええそうですわイーブンですわよイーブン!!低級ランクかつ弱小ギルドの冒険者が!今に至るまで貯金一つ無し!!いくら資金があってもこの調子じゃすぐにでも財布が干からびてしまいますわッ!!!!!!!」

かなりの迫力で詰め寄りつつもマリーに怒鳴るタイム。それを見つつ、コウはオリーブにこれからどうするのかを尋ねた。

「話は分かったけど、これからどうするんだ?日雇いのアルバ・・・いや、仕事でも探すのか?」

そんな発言に反応したのはカトレアだ。苦笑しつつも立ち上がって、冒険者ギルドの壁を指差した。

「お兄さん、その発言は流石にどうかと思うです……。私達は冒険者なんですから、冒険者らしいやり方でお金を稼ぐんです！！ほら！」

コウはカトレアの指先を視線で辿ってみた。するとそこには掲示板と紙の山。

「なるほど、クエストを受けて稼ぐのか！」

「ええ、今回のランクアップに伴って、受けることのできるクエストも増えたはずです。そこで、これから一週間の間はクエストでお金を貯めて、三階層へ行く準備をしたいと思うんです。では、私はこれからクエストを選びますから、コウ殿もなにか選んできてください。……では、夜に宿で落ち合いしましょう。」

そう言っただけでオリブは去って行った。腹が減ってはなんとやら、とコウはとちあえず残っている料理を腹に収めようと、途中で袖を引かれたので振り返る。すると、そこには涙目のカトレアが。涙目の理由を探してそこから視線をずらすと掴み合いの喧嘩をしているタイムとマリーが見えた。周囲には野次馬が集まり二人を囃したている。そんな光景に思わず漏れた溜め息が癖になっていることに落ち込みつつ、コウは喧嘩を止めに向かうのだった。



昼時を少し過ぎて、今は大体三時くらいだろうか。コウはビンタを喰らった両頬を擦った。喧嘩を止める際に一発づつ綺麗についた紅葉型の痕を抑えつつ職人区画へ向かうコウの隣には、カトレアが歩いている。コウはカトレアに愚痴を言いつつ歩いていた。

「なんでいつつも、俺に被害がくるのかな……。あの二人も、謝ってくれたからいいけどさ、謝るなら最初から喧嘩しなきゃいいのに。なあ、そう思わないか？」

そんなコウに対してカトレアは苦笑を漏らしている。大の男が現代基準なら中学生であろう少女に愚痴る様はかなり情けない光景であった。おとなしく愚痴を聞いてくれるカトレアに感謝しつつも、コウは自分が情けないヤツであることに気づいて軽く落ち込んだ。終始そんな様子で歩きつつ、目的地である武器を扱う店に着いた。両開きの扉を押し開けると、中には威めしい鎧兜や、剣や槍の刺さった樽があったりと物々しい雰囲気満ちている。並んでいる武器の間を抜けてカウンターに向かうと、これまた威めしいおっさんがこちらを見ている。即座にコウの後ろへ引っ込んだカトレアをよそに、コウは冷や汗を掻きつつ一枚の紙を取り出した。そして、そこに書いてある文章を読み上げる。

「ええつと、『魔法の掛かった品を鑑定してほしい』という依頼を、ギルド宛てに出しましたよね？俺たちは、依頼を受けて来た冒険者

で、コウと・・・。「カ、カトレア・・・です・・・。」と、いいます！  
「あ、あの、あなたは依頼を出された、スターチスさんで合ってます・・・よね？」

「ああ、ワシがスターチスで合ってるが・・・ホントに大丈夫なのか、あんたたちに任せて。」

のっけからグダグダである。カトレアの誘いで一緒にクエストを受けたコウだったが、彼は彼で初クエストに緊張しているし、カトレアは敵ついおっさんであるスターチスにビビってコウの影から出てこない。そんな彼等に不安を感じつつも、スターチスは説明を始めた。

「まあ、誰でもいいと頼んだのはこっちだから仕方ないが・・・さて、それじゃあ依頼の内容を詳しく説明するが。まあ、説明するまでもない内容だ、書いてある通り魔法の品と思われるモノが倉庫に保管してあってな、それを本当に魔法の品か、本物ならどんな効果なのかを調べてほしい。かなり多いから三日ほど掛かると思うが大丈夫か？」

「はい、その辺りは大丈夫です。じゃあ、その倉庫に案内してもらえませんか？」

「ああ、じゃあ付いてきてくれ。後、倉庫にも武具は多いから気を付けて歩けよ。」

そう言つて歩きだしたスターチスの後を追う二人。店の裏手にある廊下を抜けて暫く歩くと、頑丈そうな扉が見えた。スターチスが持っていた鍵で扉を開けると、中には広い空間と棚があり、所狭しと武具が並べてあった。そんな中でコウは奇妙な、感覚に訴えてくるような気配を放つ棚を発見した。コウとカトレアが棚に近づくと、スターチスが微妙な表情で話を始めた。

「それが今回の依頼の品だ、冒険者が迷宮から持ち帰ってきた品だな。モノがよかつたんで売りに出したんだが一週間と経たずに買ったヤツが返品しに来やがるんだよ。そのときに理由を聞いたんだが全員がこれは呪われていると口を揃えて喚きやがるんだ。しかも、その中でも剣は特別だな。一際返品されるのが早いんだよ。」

処分しようにも、呪われちゃあ叶わないんでな。頼んだぜ？と、そう言つてスターチスは店番に戻つて行つた。コウは再び棚に視線を戻す。そこには、銀色に輝く刀身を晒した剣が横たえてある。呪いの剣であると聞いたが、それは本当なのだろうか。とりあえず、今の話に怯えて半泣きのカトレアを宥めてから確認しようと、コウは小さな溜め息をつくのだった。

迷宮之漆 金は天下の回り物。(後書き)

おはにちばんわ。月海苔です。一万PVを確認しました。口からカ  
フェオレと皆様への感謝の念が溢れだしました。拙作をご覧頂き真  
にありがとうございます。感謝の番外編を書かせて頂くつもりです  
が、最近時間的余裕が無いので書きあがるのは結構後かもしれません  
ん。それに、番外より本編を優先させたいと思いますから。では次  
は次回or番外でお会いしましょう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2498x/>

---

迷宮エトランゼ

2011年11月13日04時29分発行